

派遣者番号	R2K02	氏名	古川 恵美子
研究主題 —副主題—	子供の学校適応感が高い学級経営の特徴 —学校適応感と学校評価の関連に着目して—		
派遣先	創価大学教職大学院	担当教官	宮崎 猛 大関 健道
所属	あきる野市立東秋留小学校	所属長	玉森 正一

キーワード：学級経営 学級担任 学校適応感 学校評価 学校環境適応感尺度 (ASSESS)

1 研究の背景 (目的)・主題設定の理由等

1990年代後半に小学校での学級崩壊が教育・社会問題化した(高橋・綾、2006)。文部省委嘱研究の報告「学級経営をめぐる問題の現状とその対応」(2001)では、「学級がうまく機能しない状況」の直接的な要因の一つに、学級担任の指導力不足の問題を挙げている。学級を機能させるためには、学級担任の学級経営が大きな役割を果たしている。また、杉本・小田(2019)は、教職大学院で学級経営に関する論文が増加していることを指摘しており、教員に学級経営への関心が高いことがうかがえる。

「学級がうまく機能しない状況」の典型として、学級崩壊が挙げられる。学級崩壊は、児童が学級や学校に適応していない状況でもある。そこで、本研究では、学校環境適応感尺度 (ASSESS) で児童の学校適応感を調査後、学校適応感の高い学級担任に理想の学級経営とその実際をインタビューし、子供の学校適応感が高い学級経営の特徴を明らかにする。さらに、学校経営改善を目的に毎年実施する学校評価が、学校適応感とどう関連するかについて検討し、学校評価の学級経営への活用の可能性を探る。

2 研究の方法

(1) ASSESSによる実態調査

調査時期 第1回 2020年7月
第2回 2020年10月
調査対象 都内公立小学校1校13学級

(2) インタビュー調査

調査時期 第1回 2020年8～9月
第2回 2020年11～12月
調査対象 ASSESS第1回の結果から学級AとBの担任、第2回の結果から学級KとLの担任 (図1 囲み)

調査方法 半構造化面接

分析方法 SCATおよびKJ法

(3) 学校評価と学校適応感の関連

分析対象 高学年学校評価・第2回ASSESS

分析方法 ①相関分析 ②重回帰分析
③因子分析

3 研究の結果

(1) ASSESSによる実態調査

第1回調査の12学級の結果と第2回調査の11学級の結果を図1に示す。第2回のうち、学習的適応と対人的適応の数値が共に上昇した学級は2学級であった。

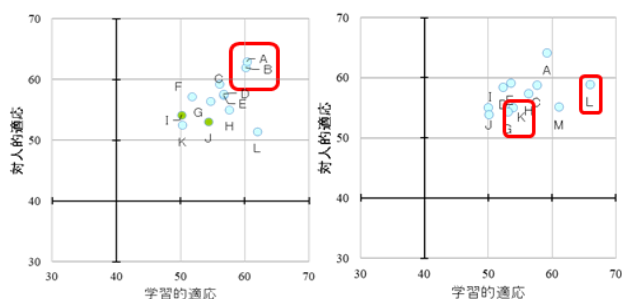


図1 ASSESS学級分布票(左：第1回、右：第2回)

(2) インタビュー調査

インタビュー内容をSCATで解析し、明らかになったストーリーラインの冒頭を示す。(表1)

学級A担任：学級経営に放牧というイメージがあり、寛容な学級を目指している。

学級B担任：学級経営に団体スポーツというイメージがあり、子供も担任も心地よい学級を目指している。

学級K担任：「子供と遊ぶ」と「保護者へ子供を褒めてもらう機会の提供」を意識し、明るく楽しく思いやりのある学級を目指している。

学級L担任：授業時間と遊び時間の担任の役割を明確にし、経験から学ぶことを大切にして子供が自分らしくいられる学級を目指している。

表1 SCAT (手続きの一部)

テキスト	①テキスト中の注目すべき語句	②テキスト中の語句の言い換え	③左を説明するようなテキスト外の概念	④テーマ・構成概念
子供が伸び伸びしてくれるのが一番だなと思っています。びしっと規則的な規律のあるクラスにも憧れるんですけど、私自身があんまりきちんとしてないので、きちんとできないことを責められるのがつらいなって自分も思っているの	子供が伸び伸びしてくれるのが一番、きちんとできないことを責められるのは自分もつらい、その子なりに取り組んだ結果を大事にしてあげたい。	児童がゆったりしている、できないことを指摘されるのは苦しい、個人の努力による成果を認める。	余裕のある学級が理想、欠点を指摘するのではなく、過程や努力を評価する。	寛容な学級、過程を重視
で、自分なりのきちんと、自分なりのちゃんとするでいいと思っていて、それが一般的にちゃんとするとか、きちんとやるとか、真面目に取り組むにはまっぴいなくても、その子が、その子なりに、取り組んだ結果を大事にしてあげたいなって思っています。				

4名の学級経営の共通点を見いだすことを目的にKJ法を試みた。図2は概念を図解化したものである。共通した特徴は、「信頼関係づくり」と「居場所づくり」において、教員経験が豊富なほど、学級経営に具体的なイメージがあり、それに即した指導をしていることであった。

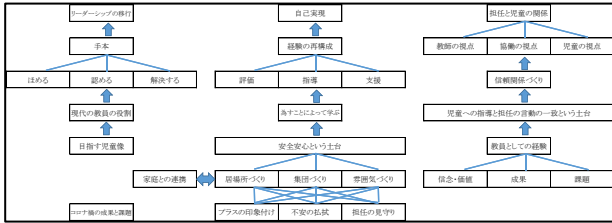


図2 KJ法 図解化

(3) 学校評価と学校適応感の分析

ア 学校評価の5領域とASSESSの相関

高学年児童 (N=150) のASSESSと学校評価の相関を示す(表2)。ASSESS 3側面(生活満足感、対人的適応、学習的適応)では、どの因子の下位尺度得点も学校評価の5領域の得点と有意な相関があった。

表2 ASSESS3側面と学校評価5領域の相関

学校評価	生活満足感	対人的適応	学習的適応
学力向上に資する授業改善	.406**	.435**	.502**
いじめ不登校ゼロへの挑戦	.538**	.528**	.457**
健康の増進・体力の向上	.339**	.370**	.269**
特別支援教育の推進	.169*	.342**	.304**
豊かな人間性を育む教育の推進	.377**	.458**	.312**

** 1%水準、* 5%水準

イ 学校評価へのASSESSの影響度の検討

学校評価5領域の合計を目的変数に、ASSESSの3因子下位尺度得点を説明変数にして重回帰分析を行った(表3)。モデルの適合度は高かった(R²=0.37:F=29.1、p<.001)。生活満足感の学校評価への影響度は認められず、対人的適応と学習的適応の影響度は高かった。(生活満足感:β=0.127、n.s、対人的適応:β=0.347、p<.001、学習的適応:β=0.277、p<.001)

表3 学校評価とASSESSの重回帰分析

分散分析表						
要因	偏差平方和	自由度	平均平方	F値	P値	F(0.95)
回帰	4856.3596	3	1618.786534	29.10447	8.23941E-15	2.66657
残差	8120.5004	146	55.61986573			
計	12976.86	149				

回帰係数の有意性の検定と信頼区間									
	回帰係数	標準誤差	標準回帰係数	偏相関係数	t値	F値	P値	95%下限	95%上限
定数項	23.312105	3.850328624	23.31210521		6.054575463	36.6579	1.1E-08	15.7025	30.9217
生活満足感	0.234394	0.167120066	0.127232013	0.115302	1.402548524	1.96714	0.16287	-0.09589	0.56468
対人的適応	0.2421924	0.064009973	0.347290792	0.29883	3.783665866	14.3161	0.00022	0.11569	0.3687
学習的適応	0.5223652	0.135726099	0.276518175	0.303495	3.848671927	14.8123	0.00018	0.25412	0.79061

ウ 学校評価の因子分析

学校評価の5領域が因子として抽出されるかどうかを、高学年(N=150)のデータを用いて分析した。主因子法、プロマックス回転により、領域の数と同じ五つの因子が抽出された(表4)。ただし、5因子の各項目は学校評価の5領

域とは異なっており、他学年との比較など慎重な検討が必要である。

表4 学校評価の因子分析

パター行列	因子					
		1	2	3	4	5
隣がいて知り、やさしい対応ができましたか。		0.811	-0.159	-0.111	-0.059	0.148
OO学級の理解教育で、OO学級の理解が深まりましたか。		0.760	-0.240	0.080	-0.037	-0.050
あなたは「運動と栄養と休養」のバランスを考えて生活していますか。		0.611	0.278	-0.039	-0.031	-0.040
健康や食べ物についての意識が役立っていますか。		0.517	0.230	0.040	-0.132	0.081
あなたはいつもあいさつができていますか。		0.438	0.189	0.105	0.315	0.000
体育の授業に楽しんで取り組んでいますか。		-0.114	0.909	-0.055	-0.023	-0.009
「運動が楽しい」「体を動かすのが楽しい」と感じていますか。		-0.057	0.753	0.002	-0.031	-0.018
先生は授業が楽しく、よくわかるように工夫をしてくれていますか。		-0.138	-0.091	0.983	-0.027	0.065
あなたはまわりの友達に思いやりをもって接していますか。		0.346	0.034	0.619	-0.070	-0.197
先生は、昔の様子をよく見て、指図に乗ってかわたり、いじめを早く発見し、対応してくれていますか。		-0.045	0.095	0.441	-0.072	0.266
OOクラスが校内にいることを知っていますか。		0.006	-0.148	0.056	0.891	-0.045
OO小には、「OOの日」や「OO体験」があることを知っていますか。		-0.111	0.085	-0.137	0.802	0.058
「学校がよい」「学校が楽しい」と感じていますか。		-0.057	0.009	0.076	0.058	0.724
毎日毎日(学校)や毎日(学校)や毎日(学校)や毎日(学校)を楽しくして、地域の良さを感えていますか。		0.350	-0.160	-0.151	-0.057	0.646
あなたは、「OO市っていいな」と思いますか。		-0.038	0.282	0.116	-0.096	0.485
学校の授業は「楽しい」「分かる」と思いますか。		0.032	-0.037	0.312	0.205	0.367
	因子間相関	0.464	0.426	0.166	0.512	
			0.452	0.133	0.470	
				0.150	0.146	

4 研究の考察

学校適応感が高い児童を育てる学級経営を行うには、担任が児童の実態を把握しながら、児童と信頼関係を構築し、児童が安心して居心地のよい雰囲気をつくるなど、理想とする学級経営のイメージをもつことが重要である。また、学級経営のイメージは、教員経験が浅い時期に挫折を経験したり、理想の学級経営のモデルに出会ったりすることを通して形成される傾向がうかがえた。加えて、学校適応感が高い児童の多い学級の担任は、児童の自己実現を目指し、担任から児童へ徐々にリーダーシップを移すという学級経営の特徴が明らかになった。

学校評価は教育活動の改善を目的に行われているが、ASSESSとの相関分析の結果から、学級経営上の児童の実態把握という目的においても有効である可能性がある。しかし、各学校で質問項目が異なるため、対象校の調査項目の5領域を因子と判断することはできなかった。学校評価が学校適応感の把握を目的として作成されていないことから考えると他の学校の学校評価にも同じことが言えよう。学校評価の項目を因子としてまとめることができれば、ASSESS等の他の尺度を用いずとも自校の学校評価で児童の実態を把握できる可能性が示唆された。

5 今後の展望

本研究では、学校適応感の高い児童が多い学級の担任にインタビュー調査を行った。今後は、「学級がうまく機能しない状況」にある学級担任にもインタビューを行い、学校適応感が高い学級の学級経営の特徴と比較することにより、明確な定義が難しい学級経営を特徴付けるものが明らかになる可能性が考えられる。今後は、本研究の結果を踏まえ、ASSESSを来年度以降の結果と比較し変化を探ったり、「学校の新しい生活様式」での教育活動における学級経営について検討したりしていく必要がある。